



さい帯血バンク NOW

第56号

2010年11月15日発行

日本さい帯血バンクネットワーク

発行者：中林正雄（会長）

〒105-0012 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社西館5階

TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417

<http://www.j-cord.gr.jp/>

全国大会を神戸で開催 決意新たに危機を克服へ

さい帯血移植は年間1000例が行われるようになり大きく成長してきました。また、移植症例数は今後もさらに増大する傾向を見せています。そうした社会的な背景のもと、日本さい帯血バンクネットワークは9月18日に年次報告会を兼ねた「2010年 神戸発 さい帯血バンク推進全国大会」を神戸ポートピアホテルを会場として、兵庫さい帯血バンクの協力により開催しました。



駆けつけて挨拶する井戸知事

●現地企業に感謝状

200席を用意した会場は、全国から集まったさい帯血バンク関係者、支援ボランティア、患者さんなどでほぼ満席となりました。全国大会はいつものように日本さい帯血バンクネットワークの中林正雄会長の主催者挨拶に始まり、厚労省、日赤、骨髄バンクやボランティア代表からの挨拶がありました。今年、開催地である兵庫県の井戸敏三知事も駆けつけ、さい帯血バンクに熱いメッセージをいただきました。

また、神戸市に本社を置く通販会社「フェリシモ」には顧客が購入して集めたポイントを社会貢献活動への寄付にも使える仕組みがあって、毎年さい帯血バンクにもその善意をいただいています。感謝状とマスコットきずな

ちゃんのぬいぐるみを今回贈呈しました。

●事業報告とシンポジウム

さい帯血バンクの年次報告として、原宏事業運営委員長から事業報告がありました。会長や来賓等の挨拶でも今年、春にあった「宮城さい帯血バンク経営危機」報道について多くの方が触れましたが、この財政的問題は、移植数が増えれば増えるだけさい帯血バンクの赤字も増大するという構造的な図式があることが指摘されました。

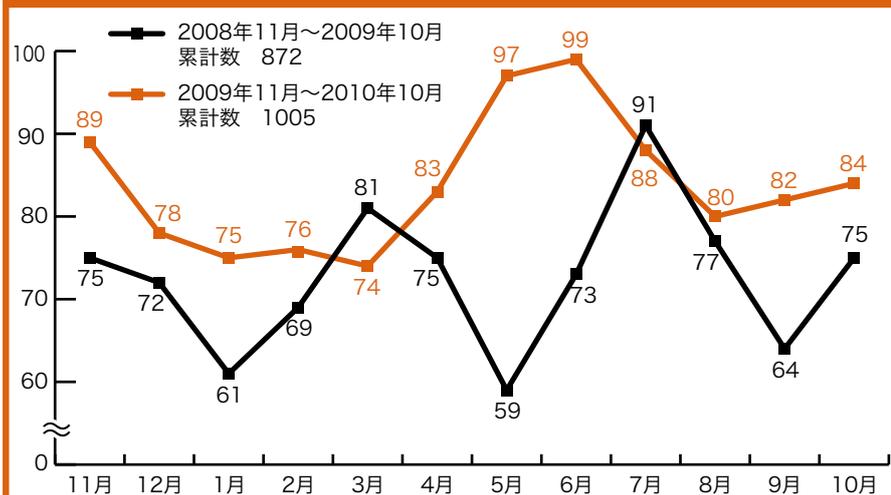
さらに「さい帯血バンクの経営危機を乗り越えよう」と題したシンポジウムがありましたが、関係者からはこの危機的状況を冷静に分析して克服しようとの決意が感じられました。なお、シンポジウムの内容は本誌第2面に掲載しています。

●全国のスタッフが和やかに

全国大会の終了後は、会場を移して懇親会を開催しました。全国の11のさい帯血バンク・スタッフが一堂に顔をそろえるとともに、地元の兵庫さい帯血バンクを支えるボランティアのみなさんも多数参加して、にぎやかに懇親を深める場となりました。経営的に苦しい各さい帯血バンクのメンバーも他バンクのスタッフから新しい刺激を受けて、これからの意欲に役立てようとしていました。

非血縁間さい帯血移植状況(2010年11月1日現在の速報値)

移植数(累計) **6778** 公開数 **33655**





さい帯血バンクの経営危機を乗り越えよう シンポジウムから見えてきたもの

昨今、さい帯血バンクの経営危機があちこちで取りざたされていますが、その問題について日本さい帯血バンクネットワークでは神戸の全国大会で正面からこの問題に取り組みました。

どこのさい帯血バンクも経営的に苦しいのは似たような状況ですが、今回の問題が表面に現れたのは、宮城さい帯血バンクの理事会報道が最初でした。シンポジウムではこの宮城バンクの理事の張替秀郎氏から「宮城さい帯血バンクの根幹にあるもの」と題してレポートしてもらいました。次に、この問題が報道される以前からネットワーク内の「将来構想検討会」で討議されていた内容について、その座長の神前昌敏氏に報告してもらい、パネルディスカッションへと入って行きました。

■年間赤字は2億円

進行役はネットワーク監事の野村正満氏が務め、パネリストは張替・神前両氏に加え、田所憲治氏（日本赤十字社血液事業部経営会議委員）、青木繁之氏（東京臍帯血バンク代表）、鈴木誓男氏（東海臍帯血バンク財務委員長）の6名でした。国（厚労省）に対してもパネリストとしての出席要請を行いました。残念ながら実現しませんでした。



11のバンクの経営形態は任意団体であったりNPO法人、財団法人など様々ですが、その運営には母体となっている赤十字血液センターや大学病院などの下支えがあって、ようやくさい帯血バンクの業務が行える状況であることが明らかにされました。

それらのバンクの経営に実務としてかかわっているパネリストからは、宮城だけでなく、毎年赤字が続く、経営母体が吸収している表面には現れていない経費や人件費などの隠れ借金を含むと、全体で年間2億円の赤字が出ているとの発表が神前氏からありました。いつまで続けられるかどうかと、さい帯血バンクがまだ本当の意味で市民運動として国民に理解されていないのではなどと、バンクの置かれている現状が明らかにされました。

■事業の根幹の見直し

さい帯血バンクの収入は設備整備費を含む補助金や、移植1件当たり17万4000円という保険収入、そしてわずかな寄付金などでまかなわれており、移植患者さんには基本的に負担はありません。そして補助金が収入の90%を占めています。この公的支出は、法律に基づいているものではなく、民間の事業の一部を国が補助するという、国の責任と負担が明確ではないことから今の問題が生じていること、さい帯血バンクと国の間でコストについて共通のものがないということ、など事業の根幹に関する意見や、細胞そのものに保険点数をつけてほしいと要望してきたが実現されておらず、骨髄バンクの保険点数とはかなりのか

い離が生じてきているが、これは関係者の努力が足りなかったのではないかと、という反省もありました。

また、地域のバンクが競争して3～4のバンクをネットワーク設立当時想定していたのに、それを絞り込まないでスタートしてここまで来たから、このような現実となったという意見……さらに、それぞれのバンクがこの問題についてもっと声をあげていかなければならないとか……各バンクも日本の医療にどう役立っているか自分の足元をしっかりと見つめ努力すべきだとの発言もフロアからあり、活発な議論が行われました。

■日赤本社が前向き姿勢

当初は実験的な医療として始まったさい帯血移植も、今や標準的な医療となってきている現在においては、設立当初の考えから切り替えていかなければならず、調整保存施設を統合するにしても採取から保存までの時間がネックになり、今の技術ではこれを伸ばすのが難しいことがあげられました。

制度そのものを変えていくにしても、全体としてどう運営していくか、どのくらいの規模でやっていくかが大切で、もっと検討していく必要があるという意見が出されました。今回の収穫は、フロアから発言のあった「日赤が窓口として骨髄バンクとともに一本化してほしい」という意見に対して、日赤としてはこれまで積極的に議論はしてこなかったが、この問題に対して後ろ向きになるわけにはいかず、血液の関連事業という位置づけで取り組むことを検討していきたいと前向きな意見が出されたことでした。



すこやかに、幸せに。
明日への夢、描きたい。

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。

NIPRO
ニプロ株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番3号



事業評価委員が見た北海道臍帯血バンク

北海道赤十字血液センターには故関口定美所長という先見の明を持つオピニオンリーダーがさい帯血バンク開設当時におられた。「献血という大きな木」というおしゃれなシンボルマークを考案され、その木には太い枝が2本ある。血液事業の柱を示すその1本は輸血用の血液製剤を表し、もう1本の方はボランティアの方から提供される造血幹細胞を表していた。献血者と同じようにボランティアの方々が臨床医学に貢献していただけるように、提供していただけるものを血液センターの業務対象に加えることを提案されていた。さい帯血バンクが発足する以前から末梢血幹細胞採取という、通常は移植治療を行う病院内で行う業務も血液センターが支援していた。これにさい帯血バンクを樹立することも血液センター事業の領域と考え、設立を推進した。さい帯血バンクの基礎が固まったところに体調を崩して永眠されたが、関口所長の先見の明は、血液事業の中でその他多くの領域でも現在実現していることに感嘆する。

●バイオアーカイブ第1号

有名な米国ニューヨーク血液センター内でRubinstein先生の設立されたさい帯血バンクをスタッフが研修し、基礎となる技術、必要な人材、検査体制、など多くを学んだ。米国企業のサーモジェネシス社が大容量の凍結さい帯血バッグの保存装置であるバイオアーカイブを開発したが、その装置の第1号がこのバンクに導入された。さい帯血バッグを細胞の活性を落とさずに凍結できるプログラムフリーザーとしての機能と、液体窒素タンク保存庫を一体化させた装置であり、約3500個のさい帯血バッグを収

納できる。またバッグの収容と取り出しを全てプログラム化されたロボットアームで行うこともできる。ただし重量が重く血液センター内の製剤課スペースに設置する際には、床の補強工事と、屋外据え置き的大型液体窒素タンクとの真空配管接続など、相当の自己資金を持ち出して完成させたようだ。できるだけ無菌環境内での作業ができるよう、製剤課スペース内にある無菌室をさい帯血バンク専用転用した。

ニプロ社と一緒に開発研究にタッチし、現在広く使われているさい帯血凍結バッグを開発していくための基礎検討も行った。バッグの材質を改良し、凍結したまま1メートルの高さから落下させても亀裂が入らない材質にすることを目標に完成品を市場に出すことができた。

●「北海道のへそ」

発足当初、さい帯血採取施設は血液センタースタッフが地下鉄を利用して毎朝引き取りができる病院にお願いしていた。面白いエピソードとして、北海道のあちこちの町から、「是非私のさい帯血を使って欲しい」という希望が電話で伝えられてきた。特に富良野市青年会議所からは、富良野は「北海道の臍」と呼ばれている町なので、「臍」を合言葉に是非提携をしたいとリクエストがあったことである。ただ残念ながら、採取で重要なことは、慣れた産科医が無菌的にさい帯血を安全に採取することであり、また搬送に時間がかかりさい帯血の細胞の品質が劣化することが懸念され、結局は気持ちだけいただく形で提携は断念することになった。

●清浄な環境での調整保存

日本さい帯血バンクネットワークの事業評価委員として、筆者は北海道臍帯血バンクに既に3回現地調査に行く機会があったが、血液センター内の製剤課内の無菌室という非常に清浄な環境でさい帯血の調整保存作業が行われ、血液センターを母体とするさい帯血バンクらしく、マニュアル、SOP、教育環境などが

完備されたバンクである。事業評価委員会の中に現地調査企画小委員会があり、毎年行う現地調査のチェックリスト作成や、毎年の現地調査重点項目の選定、第三者外部評価のテーマ選定など担当しているが、北海道臍帯血バンクの実務担当者に優れたメンバーがいらっしゃることはチェック済みで、近い将来委員として参画していただきたいと願っている。(池淵)



優れもののバイオアーカイブ

■善意のお気持ちに感謝します■

茨城県	(有)茨城県西自動車学校	48,975円
大阪府	福田博行様	20,000円
愛知県	新平信子友人ご一同様	18,000円
神奈川県	佐藤カツ子様	10,000円
千葉県	匿名希望	10,000円
兵庫県	佐藤友明様	10,000円
埼玉県	大寺信行様	6,000円
岩手県	遠藤律枝様	3,000円

〈寄付受け付け専用口座〉

●郵便局からの振り込み

00180-9-57390

●他の金融機関からの振り込み

金融機関名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

支店番号：019(銀行のATMから当ネットワークへ寄付金を送金する場合は支店名は『ゼロイチキュー』と入力してください。)

預金種目：当座

口座番号：0057390

口座名義：日本さい帯血バンクネットワーク

献血という大きな木





移植病院 訪問

⑩がん・感染症センター 都立駒込病院

歴史ある移植病院 の新たな門出

がん・感染症センター都立駒込病院は、1989年から造血幹細胞移植病棟を設置し、年間70~80件の移植をおこなう、いわば「老舗」の病院です。日本でトップランクを誇る骨髄移植件数の病院ですが、2000年よりさい帯血移植が始まり年に10数件のさい帯血移植を施行していますが、近年は増加しています。歴代の血液内科部長である小野寺康輔先生、坂巻壽先生、秋山先生と引き継がれた体制が、今は多くのメディカルスタッフと他の診療科のサポートで、めくるめく変動する移植医療の多様性に対応し、移植数と質を維持している現状を取材してきました。

今年9月新病棟開設

22年目を迎える移植病棟は、病院の改築に伴い2010年9月1日より新病棟へと生まれ変わりました。移植病棟のベッド数は32床で、そのうち移植に用いられる個室は16床です。看護師の岡本恵美子さんは「個室病床はシャワールームも完備され患者さんの療養環境が良くなりましたが、感染管理や患者さんへの関わり方など、看護体制を再構築する場面にきていていると思います」と語ります。また、秋山部長も同様に「新病棟になって環境も変化し、スタッフの入れ替わりもあるので、医療スタッフの再教育や新たなシステム作りを考えています」と熱く語ってくれました。以心伝心ではありませんが、医師と看護スタッフの連携をかいま見ることができ、常に質を維持し、高めていこうというチームの意気込みを感じました。



血液内科の医師とメディカルスタッフのみなさん

メディカルスタッフの 層の厚さ

血液内科では、メディカルスタッフを交えたカンファレンスが週に1度おこなわれています。若手医師が患者さんの病状や治療の経過、今後の方向性について説明し、治療の方向性が的確であるか否かを医療スタッフで話し合う場です。医師や看護師だけではなく、歯科衛生士、臨床心理士、薬剤科、輸血部、移植コーディネーターと総勢20名前後のスタッフが集合します。「この場に参加していない他の診療科も、さまざまな合併症の出現に早急に検査等の対応をしてくれる体制が心強い」と秋山部長も語っています。

口腔ケアの指針も

また、参加しているメディカルスタッフの層の厚さにも驚きます。歯科衛生士の池上由美子さんは、移植医療における口腔ケアの専門家です。移植後感染症の発生は口腔内からの感染が多いといわれるほど、口腔ケアは移植医療では重要な位置を占めています。2002年から移植病棟に口腔ケアラウンドを取り入れ、移植前から移植後まで継続してケアにあたります。これはとても先駆的な取り組みで、導入当初は



口腔ケア用品

患者さんの状況把握から介入方法まで、前例がなかったので大変だったようです。病棟の看護師さんとの共同作業で確立した体制を元に「造血幹細胞移植における口腔ケアガイドライン」の作成にも尽力されています。このガイドラインが作成されれば、日本全国どこでも移植を受けられる患者さんの口腔ケアの指南書となり、口内炎やその痛みから解消されるでしょう。待ち遠しい限りです。

臨床心理士と コーディネーター

さらに、駒込病院では移植前に必ず臨床心理士の面談があって、メンタル面でもサポート体制の充実があります。近年、造血幹細胞移植における移植コーディネーターの配置について各病院で検討されつつあります。移植医療は造血幹細胞を提供するドナーがいなければできない医療です。駒込病院では2008年6月より移植コーディネーターが配置され、骨髄バンクやさい帯血バンクとの円滑なやりとりのもと、適切に的確なドナーの準備がされています。この、他科との連携やメディカルスタッフの層の厚さが、移植数やその質を維持されている秘訣かもしれません。秋山部長は「派手な事はしていませんが、いろんな職種の方のサポートを受けて地道に着実にこれからもやっています」と決意を語っています。